

【資料紹介】

Brief in Zement von Yoshiki Hayama

—葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」の戦前ドイツ語訳—

和田 崇

1. 解題

本稿では、戦前のドイツで発行された新聞 *Berlin am Morgen* の1931年2月6日付の紙面に掲載された、葉山嘉樹の「セメント樽の中の手紙」のドイツ語訳を翻刻し、紹介する。

「セメント樽の中の手紙」は『文芸戦線』3巻1号（1926年1月号）に発表された短編小説であり、プロレタリア文学作品の中でも比較的政治色が薄い一方で、労働にまつわる普遍的な内容を描いていることから、教育現場でも広く読まれてきた。1973年に学校図書『高等学校現代国語一』に掲載されて以降、教育出版や三省堂、第一学習社や筑摩書房など、高校で使用される多くの国語教科書に収録されつづけ¹、来年度（2022年度）から使用される大修館書店発行の『言語文化』にも収録されており、国語教育とも親和性が高い作品である。

私は JSPS 科学研究費 16K16761 の助成を受け、2016年8月22日から27日にかけて、当時は Westhafen にあった Staatsbibliothek zu Berlin（ベルリン州立図書館）の新聞資料室で、戦前のドイツの新聞に掲載された日本のプロレタリア文学作品を調査した。本稿にて取り上げるのは、その際に発見した新資料であり、既に『研究経過報告書』²でその存在を明らかにしていた。しかし、タブロイド版の新聞を撮影したマイクロフィルムの資料につき、不鮮明な箇所が多く、書体も作者名と表題だけはアンティカ体

（ローマン体）だが、本文はすべてフラクトゥールで表記されていて大変読みにくい。この度、広く他の研究者にも活用してもらうことを企図して、翻刻のうえ紹介することにした。

これまで、「セメント樽の中の手紙」のドイツ語訳について、いくつかの日本文学翻訳文献目録³では、日本の短編小説アンソロジーである *Nippon. Moderne Erzählungen aus Japan von Mori Ogai bis Mishima Yukio, Auswahl und Einleitung von Ivan Morris, Diogenes, 1965.* に収録され、Monique Humbert が英語から重訳した、*Der Brief im Zementfaß* (pp.239-244) が初訳として掲載されてきた。そのため、本稿で紹介する *Brief in Zement* という *Faß* (樽) のない表題が付けられた1931年の翻訳の発見によって、初訳が更新されたことになる。

この *Brief in Zement* (1931) を翻訳したのは、演出家で俳優の千田是也（本名：伊藤因夫）と、ATBD（ドイツ労働者演劇同盟）の幹部であった Alf Raddatz である。彼らの翻訳活動については、拙稿で何度か取り上げている⁴ため詳述は避ける。なお、千田と Raddatz が共訳の際に用いた原文は定かではない。ちなみに、翻訳が発表された時点で「セメント樽の中の手紙」が掲載された書籍は、初出の『文芸戦線』に加え、短編集『淫売婦』（春陽堂、1926年）と『新選葉山嘉樹集（新選名作集）』（改造社、1928年）、『仁丹を追っかけろ（プロレタリア前衛小説戯曲新選集）』（塩川書房、1930年）の3冊があったが、これらの諸本間では翻訳に影響するような校異がないため、典拠を確定することはできない。

掲載紙の *Berlin am Morgen* については、ヴァイマー期のドイツ左翼運動と映画の関係を論じた Bruce Murray の説明が参考になる。Murray によると、*Berlin am Morgen* は Willi Münzenberg が設立した IAH（Internationale

¹ 阿武泉編『読んでおきたい名著案内：教科書掲載作品13000』（日外アソシエーツ、2008年）pp.551-552を参照。

² <https://kaken.nii.ac.jp/file/KAKENHI-PROJECT-16K16761/16K16761seika.pdf>

³ *Modern Japanese Literature in Translation: A Bibliography*, compiled by The International House of Japan Library, Kodansha International, 1979, p.61 / *Moderne japanische Literatur in deutscher Übersetzung: Eine Bibliographie der Jahre 1868-2008*, Herausgegeben von Jürgen Staphet al., Iudicium, 2009, p.54

⁴ 『太陽のない街』の翻訳と伝播：『Die Straße ohne Sonne（独訳）を中心に』（『日本近代文学』88集、2013年5月）、「ドイツにおける『太陽のない街』の翻訳と受容：断片掲載された「日本の『ジェルミナル』』（『社会文学』55号、2022年3月発行予定）を参照。

Arbeiterhilfe: 国際労働者救援会) 傘下の新聞であり、同じ IAH 系の新聞としては、他に AIZ (Arbeiter-Illustrierte-Zeitung) と Welt am Abend があった。ベルリンでは、1926 年に創刊された夕刊の Welt am Abend が先に発行されていたが、同紙が 1928 年には 175,000 部近く発行されるなど、ドイツで最も広く配られる夕刊紙の一つに成長したため、これに加えて Ruhrgebiet (ルール地方版) と朝刊の Berlin am Morgen が創刊されるに至った。Welt am Abend と Berlin am Morgen には大きな feuilleton (文化欄) があり、ドイツ共産党の機関紙 Die Rote Fahne と比べると、政治志向のない娯楽作品を非難するのではなく、時折賞賛もしていた。IAH 系の新聞は、こうした露骨に党派的でない側面を持っていたため、検閲を避けて粘り強く報道をつづけた。⁵

Berlin am Morgen ないし IAH 系新聞に見られる政治性や党派性に寛容な姿勢は、「セメント樽の中の手紙」の翻訳が掲載される一因となったと考えられる。なぜなら、同作品の作者と訳者の間には、明らかに政治的な対立があったからだ。

そもそも、当時の日本のプロレタリア文化団体は、支持政党の違いから大きく二派に分かれており、葉山嘉樹の所属したのが合法無産政党を支持する文芸戦線派であったのに対し、千田是也の属したのは非合法無産政党 (日本共産党) を支持するナツ派であった。こうした「セメント樽の中の手紙」の戦前ドイツ語訳をめぐる作者と訳者の政治思想の捩れは、看過できるものではない。それを象徴するように、Berlin am Morgen に翻訳が掲載される直前の 1930 年 11 月には、千田とともに当時ベルリンに滞在していた勝本清一郎と藤森成吉が、ウクライナの都市ハリコフで行われた第 2 回革命作家国際会議 (通称「ハリコフ会議」) に出席し、葉山の所属する文芸戦線派を徹底的に非難する報告を行っていた⁶。

しかし、戦前には文芸戦線派を非難していたその勝本清一郎が、戦後に

興味深い回想を残している。勝本は、当時のナツの動向を振り返って、次のように述べている。

ナツでは、アンチーミタリズムの統一戦線を提唱しながら、一方で同時に文芸戦線をたたいていた。そういうこともあったが、僕たちは非常に文芸戦線一派の創作能力、特に葉山嘉樹たちを高く評価していた。ところがプロレタリア作家同盟で、それを変にいろいろ決議したりして、ロシアでも困っていた。⁷

あくまで推測の域を出ないが、おそらく翻訳者の千田是也にも同じ思いがあったに違いない。そもそも、異国の地ではあれ、敵対する勢力の宣伝となるような作品を翻訳することは勇気のいることである。実際、戦前のドイツのメディアで千田が翻訳を手掛けたのは、私が確認できた範囲では「セメント樽の中の手紙」を除きすべてナツ派の作品であった⁸。それだけ、この作品には党派を超えた魅力が備わっていたのである。

最後に、千田と Raddatz によるドイツ語訳の特徴を簡単に紹介して解題の終わりとしたい。あらかじめ断っておくと、私はドイツ語初級者であり、文法的な誤訳や微妙なニュアンスの違いまでは指摘できない。ただし、次の 3 点については、私の語学力でも気づくことができた。

1 点目は、全体として翻訳が説明的になっていることである。たとえば、冒頭の「セメントあけ」⁹は、「die Zementfässer öffnen und den Zement in die Betonmischmaschine bringen (セメント樽をあけてセメントをコンクリートミキサーに入れる)」と補足されている。また、「ミキサーはやがて空廻りを始めた」という箇所は、「Bald rasselte die Betonmaschine auf Leerlauf (コンクリートマシンはやがて空廻りしてガラガラと音を立てた)」に、

⁷ 勝本清一郎「プロレタリア文学と私」(伊藤整ほか編『鑑賞と研究=現代日本文学講座/小説 6 =プロレタリア文学・モダニズム文学』三省堂、1962年) p.323

⁸ 和田崇編『戦前期ドイツの雑誌・新聞における日本プロレタリア文学関連記事目録』(https://www.cc.mie-u.ac.jp/~wadataka/indexA_2ed.pdf) を参照。

⁹ 「セメント樽の中の手紙」の日本語原文の引用は、以降すべて『葉山嘉樹全集 第一巻』(筑摩書房、1975年) pp.249-251 に拠っている。

⁵ Film and the German Left in the Weimar Republic: From Caligari to Kuhle Wampe, by Bruce Murray, University of Texas Press, 1990, p.114/188/256

⁶ この経緯については、拙稿「日独プロレタリア文学の往来：雑誌 Die Links-kurve を中心に」(『立命館文学』652号、2017年8月) で既に論じている。

セメント樽に入っていた箱の中身をなかなか取り出せない場面で、与三が「思はせ振りしやがらあ、釘づけなんぞにしやがつて」と発話する箇所は、「„Das sieht ja umständlich aus, mit Nägeln . . .“ sagte er verächtlich（「釘づけにされて、面倒くせえなあ……。」と、彼は蔑むように言った）」というように、やはり説明が加えられている。

こうした翻訳独自の補足的説明で特筆できるのが、女工の手紙の中で、恋人がクラッシャーに飲まれていった理由として「Die Maschine anzuhalten ist verboten, weil dann die ganze Fabrik stockt（工場全体が止まってしまうため、機械を止めることは禁止されている）」と書かれている点である。日本語の原文にはないこの説明により、周りにいた労働者たちが機械の電源を落とすことなく、あくまで工場の稼働を優先しながら仲間の命を助けようとしたことがわかる。このように、訳文と原文を照らし合わせることで新たな解釈も浮上するのである。

2点目は、比喻表現の翻訳に揺らぎがあることである。たとえば、冒頭にある与三が「セメントで灰色に蔽はれてゐた」という描写は、「eingehüllt in Zementstaub（セメントの塵で蔽われていた）」と訳されており、また、女工の手紙における「石と恋人の体とは砕け合つて、赤い細い石になつて、ベルトの上へ落ちました。ベルトは粉碎筒へ入つて行きました」という描写では、「Sein Körper mischte sich mit den Steinen und fiel auf das Transportband und wurde mit den Steinen in die Pulvermühle getragen（彼の体は石に混じってベルトコンベアーの上へ落ち、石と一緒に粉砕機へと運ばれていきました）」と、「赤い細い石」というグロテスクな比喻が反映されていない。

一方で、比喻をそのまま訳している箇所もある。たとえば、「木曾川の水が白く泡を嚙んで、吠えてゐた」という情景描写は、「heulte der Kisso=Fluß und trieb weißen Schaum（木曾川が吠えて白い泡を立てていた）」と、「川」が「吠える」という特殊な表現をほぼそのまま翻訳している。また、セメント樽に入っていた箱の中身を取り出すために「この世の中でも踏みつぶす気になつて、自棄に踏みつけた」という与三の動作は、「trat er wütend mit dem Absatz darauf, als wollte er die ganze Welt zertreten（この世

すべてを踏みつぶすかのように、かかとで激しく踏みつけた）」と、これもまた原文の比喻をほぼそのまま踏襲している。このように、原文の比喻をそのまま訳しているところもあれば、そうでないところもある。

3点目は、結末部を中心に大きな加筆が見られることである。基本的はこの翻訳では、長い一文を二文以上に分けたり修飾語を大胆に削除したりと、文章を簡潔にしようとする意思が感じられる。ただし、段落の分け方については一貫性がなく、段落の途中で改行して新たな段落を設けている箇所もあれば、女工の手紙の前半部では、原文ではいくつかに分けられている段落を詰めて一つにまとめている。さらに、前掲した補足説明よりも目立つかたちで、明らかに原文にはない文を補っている箇所がある。

物語の結末部では、大きな加筆が三つ確認できる。まず一つは、与三が子供たちの騒ぎ声を知覚した後に、訳文では「Er schloß fest seine Faust um das Stück Tuch von der Bluse des ihm unbekanntes Mannes, der zu Zement wurde（彼はセメントになった見知らぬ男の仕事着の裂を、拳で力強く握り締めた）」と挿入されている。次に、「へどれけに酔つ払いてえなあ。さうして何もかも打ち壊して見てえなあ」と呶鳴つた」理由として、訳文では「brüllte er vor Schmerz und ohnmächtiger Wut（彼は悲しみやなすすべもない激しい怒りのあまり怒鳴った）」と説明が加えられている。最後に、原文では「彼は、細君の大きな腹の中に七人目の子供を見た」と余韻を残して物語が閉じられているが、訳文ではさらにその後「schwieg und ging zur Arbeit. Aber in seiner Seele brannte ein Funke und wartete auf den Wind, der ihn zur Flamme wachsen lassen würde（黙って仕事に出かけた。が、彼の心には火花が散っており、それを強く燃え上がらせる風を待っていた）」と詩的な表現が追加されている。

原文を尊重しつつも明らかに独自の加筆をした千田と Raddatz の共訳について、その翻訳の意義や訳文の良し悪しについては、私よりドイツ語の読める読者の判断に委ねたい。次節で示す、Brief in Zement の翻刻によって、「セメント樽の中の手紙」の日本語テキストについても、新たな解釈が拓かれることを期待している。

2. 翻刻

Yoshiki Hayama

Brief in Zement

Yoso Matzudo mußte die Zementfässer öffnen und den Zement in die Betonmischmaschine bringen. Er war ständig eingehüllt in Zementstaub; besonders in den Haaren, auf dem Bart und dem Kopf hatte sich der Staub dick abgelagert. Er wollte mit dem Finger den Zementstaub, der die feinen Haare in der Nase hart gemacht hatte wie Eisenbeton, herausholen. Aber er kam nicht dazu, er hatte einfach keine Zeit. Die Konkritmaschine, die in einer Minute 10 Zentner Beton ausspuckte, wollte zu fressen haben.

Die Nase brannte ihm. Zwar hatte er zwei Pausen, Mittagspause und Teepause, mittags jedoch hatte er zu großen Hunger, und in der Drei=Uhr=Pause mußte er den Betonmixer reinigen, und so kam er den ganzen Tag nicht dazu, seine Nase in Ordnung zu bringen.

Kurz vor Feierabend fand er in einem Zementfaß, das er mit müden Armen herangerollt hatte, einen kleinen Holzkasten.

— Was soll das bedeuten?

Er fand es zwar sehr merkwürdig, aber er hatte keine Zeit, sich jetzt darum zu kümmern. Er kippte den Zement in die Meßkiste und von dort in den Fülltrichter der Mischmaschine, dann wollte er das leere Faß zu anderen werfen — aber warte, das ist doch seltsam, ein Holzkasten in einem Zementfaß — und er nahm den kleinen Kasten und steckte ihn in seine Tasche.

— Sehr leicht, viel Geld wird also nicht drin stecken.

Dann konnte er nicht mehr daran denken, er mußte schon wieder das nächste Faß in die Meßkiste schütten.

Bald rasselte die Betonmaschine auf Leerlauf, das war das Signal für

Arbeitsschluß.

Er wusch sich wie immer Gesicht und Hände unter dem Wasserschlauch der Mischmaschine, hängte sich seinen Eßkasten um den Hals und machte sich auf den Weg zu seiner Baracke, seine Gedanken waren in der Hauptsache auf das Abendessen und den Abendtrunk gerichtet. Das Turbinenwerk, an dessen Bau er arbeitete, war schon zum größten Teil fertig. Ihn fror, sein verschwitzter, erschöpfter Körper fühlte die Kälte besonders.

Der Ena=Berg, der hoch ins Dunkle ragte, war weiß von Schnee, zu seinen Füßen heulte der Kisso=Fluß und trieb weißen Schaum.

Beim Gehen dachte er an die vielen Kinder in seiner Wohnbaracke, dazu war seine Frau schon wieder schwanger — was zum Teufel soll daraus werden — bei dieser Kälte noch ein Kind in die Welt zu setzen.

— Wenn bei einem Tagelohn von 1 Yen 90 Sen zwei Sho Reis 1 Yen kosten und das übrige für Kleidung und Wohnung draufgeht, wovon soll man da noch Reiswein trinken —.

Da erinnerte er sich des kleinen Kästchens. Er zog den Kasten aus der Tasche und wischte den daran haftenden Zementstaub an seinem Hosenboden ab.

Nichts war auf dem Kasten geschrieben, aber der Deckel war fest vernagelt.

„Das sieht ja umständlich aus, mit Nägeln . . .“ sagte er verächtlich. Er schlug mit dem Kasten auf einen Stein, aber der Kasten ging nicht auf. Da trat er wütend mit dem Absatz darauf, als wollte er die ganze Welt zertreten.

Aus dem zerbrochenen Kasten kam ein in Lumpen gewickelter Zettel heraus, darauf stand folgendes:

„Ich bin eine Zementsacknäherin in der N=Zementgesellschaft. Mein Freund arbeitete in der Steinmühle, und am Morgen des siebenten Oktober fiel er mit einem schweren Stein zusammen in den Brecher. Seine Kollegen wollten ihn herausziehen, aber er ging in den Steinen unter wie in Wasser. Die Maschine anzuhalten ist verboten, weil dann die ganze Fabrik stockt. Sein Körper mischte sich mit den Steinen und fiel auf das Transportband und wurde mit den Steinen in die Pulvermühle getragen. Da wurde sein Körper mit den Steinen zusammen

von den stählernen Kugeln kleiner und kleiner gemahlen. Das donnernde Poltern war sein letzter Schrei. Dann wurde er gebrannt und wurde zu grauem Zement. Mein Freund wurde ganz zu Zement. In meinen Händen blieb nur ein Stück seiner Arbeitsbluse. Mein lieber Freund wurde zu Zement, und am nächsten Tag schrieb ich diesen Brief und steckte ihn in dieses Faß.

Bist Du ein Arbeiter — wenn Du ein Arbeiter bist, dann habe Mitleid mit mir und antworte mir.

Wo der Zement in diesem Faß gebraucht wird, das möchte ich wissen. Bist Du ein Maurer oder ein Bauarbeiter?

Ich kann nicht leiden, daß mein Freund zu einem Korridor eines großen Theaters oder zu einer Villa wird. Aber ich kann es wohl nicht hindern; wenn Du ein Arbeiter bist, brauche diesen Zement nicht an einer solchen Stelle.

Aber gut, Du kannst es auch tun, kannst ihn überall brauchen. In welche Stelle mein Freund auch gemauert wird, er wird überall gut tun. Er kann alles leisten, wo er auch steht. Er war ein guter Mensch und hatte ein großes Herz, er war noch jung, sechszwanzig ist er geworden. Wie er mich geliebt hat . . . trotzdem muß ich ihm statt des Totenhemdes einen Zementsack anziehen. Er wurde nicht in einem Sarg getragen, er ging in den Brennofen. Wie kann ich ihn ans Grab begleiten, er ging nach Westen und nach Osten, in die Ferne oder in die Nähe.

Wenn Du ein Arbeiter bist, dann schreibe mir. Dafür gebe ich Dir ein Stück von seiner Bluse. Das Tuch, in das der Brief gewickelt ist — darin ist Steinpulver und sein Schweiß —.

Bitte schreib mir genau, wann dieser Zement gebraucht wurde und wo, an welcher Stelle, und wenn du es recht findest, auch Deinen Namen. Hüte Dich auch vor Unglück. Auf Wiedersehen.“

Yoso Matzudo hörte den kreischenden Lärm der Kinder.

Er schloß fest seine Faust um das Stück Tuch von der Bluse des ihm unbekanntes Mannes, der zu Zement wurde. Er schluckte mit einem Zug den Reiswein aus seiner Tasse, indem er Adresse und Namen am Schluß des Briefes

las.

„Ach ich möchte besoffen sein oder alles zerschlagen,“ brüllte er vor Schmerz und ohnmächtiger Wut.

„Aber Mann, wie kannst du dich betrinken oder alles zerschlagen, was soll denn aus unsern Kindern werden?“ sagte seine Frau.

Er sah den gewölbten Leib seiner Frau, die sein siebentes Kind trug, schwieg und ging zur Arbeit. Aber in seiner Seele brannte ein Funke und wartete auf den Wind, der ihn zur Flamme wachsen lassen würde.

(Aus dem Japanischen von Ito Raddatz.)

【付記】本稿は、科学研究費補助金（若手研究・課題番号19K13053）の助成を受けた研究成果の一部である。